大学体育研究　23：105－111，2001

テニスプレーヤーあこがれの地―ウインブルドン―

山田幸雄，後藤光将*

The ground of longing of tennis player—Wimbledon—

Yukio Yamada, Mitsumasa Gotoh

はじめに

平成12年度における総合科目の一つとして，体育センターでは「スポーツその遺産（The great of sports)」を開講した。開講の趣旨は，スポーツに関する様々な事柄の中で，後世に残ると思われるもの，あるいは後世に語り継ぐに値すると思われるものを紹介しようというものであった。

自らがプレーしたり，様々なスポーツを観戦するのもスポーツに対する大きな楽しみの一つであり，筑波大学に入学した学生の多くは，学校，地域での活動等を通して，様々なスポーツに関わってきたことが考えられる。そして，スポーツが好きになった学生もいれば，スポーツが嫌いになった学生，様々であろう。スポーツその遺産では，これら学生にスポーツに対する関わり方への幅広さ，奥の深さ，視点の多様さ等を学ばせることによって，スポーツへの幅広い理解，共有できる価値観の膨らみを与えようとするものである。このことは，多様なスポーツの楽しみ方を持つ人々の増加，スポーツはあまり行わないまでもスポーツに肯定的な人々の増加を期待できると考えられる。

*筑波大学体育科学研究科

スポーツその遺産では，各学期を2回に分け，下記に示したような6編の大きなテーマから構成した。1編は4回の講義と1回のフォーラムからなる。

①英雄編
②文芸・芸術編
③イベント編
④番外編―シドニーオリンピック特集―
⑤サイエンス・テクノロジー編
⑥聖地編

本論で取り上げるのは，⑥聖地編で行われたST ANDREWS—HOME of GOLF—，ウインブルドン―テニスプレーヤーあこがれの地―，オリンピアー復興近代オリンピックの聖地―，国技館―相撲のシンボリズム―，の4編の中からウインブルドン―テニスプレーヤーあこがれの地―についての講義のまとめである。

毎年，6月下旬から7月初旬にかけてイギリスのロンドン郊外のウインブルドンで全英テニス選手権が開催される。この時期，ロンドンは1年の中で最も過ごしやすい素晴らしい季節であり，ロンドンの町もウインブルドン一色になるといわれている。

今日，世界のテニス界におけるトーナメントは，全英テニス選手権（ウインブルドン），全仏テニス選手権(ローランギャロス)，全米

テニス選手権，全豪テニス選手権の4大トーナメントを頂点としたシステムによって組織され運営されている。そこでは，4大トーナメントは同格であること，他のトーナメントとは一線を画した特別の大会であると位置づけられている。その中でも，ウインブルドンに出場したことのある日本のテニスプレーヤーに4大トーナメントに対する感想を聞いてみるとウインブルドンだけは特別であるという。何が特別であるのか尋ねても，雰囲気であるとか，何となく，という答えが返ってくるのみである。このように，テニスプレーヤーにとってウインブルドンは，特別の思いを持つ別格の大会なのである。

それは，なぜなのか。そのことについて何らかの回答を見つけようというのが，聖地編「ウインブルドン」の講義の目的である。ウインブルドンがなぜテニス界最高の大会としての栄誉を受け続け，すべてのテニスプレーヤーが憧れつづけるのかを考えてみようというものである。

19世紀の英国スポーツ

ウインブルドン大会を考えるには，ウインブルドン大会が始まる前後，すなわち19世紀におけるイギリスのスポーツ事情を知ることが必要であると思われる。そこで，19世紀における「イギリスのスポーツ」について概観する。

イギリスは，産業革命を経てもなお，一貫してジェントルマンと呼ばれる少数のエリート階級によって支配され，それが19世紀を通して維持されてきたといわれている。パブリック・スクールはジェントルマンの養成機関として支配体制の維持に大きく貢献してきた。このことは，自ずとこの国のスポーツ文化のあり方にも大きな影響を及ぼした。事実，スポーツが元々優れた精神性を備えていたからエリート教育に取り入れられたというよりは，エリート教育に取り込まれていく中で時代にかなった精神性を付与されてきたと考えられる。現在，地球規模で「世界化」したスポーツといえば，サッカーがあげられるが，これもイギリスにおいて今日の形態をなし，その後各地に伝播したものである。サッカーの中に息づくフェアプレーの精神は，もともとパブリック・スクールやオックスブリッジで培われたものである。

また，19世紀のイギリスでは一般の人々に対して「理性にかなった娯楽」が推奨されるようになった。クリケットやフットボールは元来は民衆の娯楽であり，伝統的な祭りの中で行われてきたものであるが，時にはジェントルマンがパトロンとなったり，パブの店主が興行として試合を組織することもあった。このようなジェントルマンのスポーツ活動の拠点がクラブハウスで，民衆の娯楽活動の中心はパブであった。そこで作り出されてきた価値観は，時代と共に一部は否定され，一部は継承されていった。後に世界各地に伝播するイギリススポーツの精神的な価値観は，実はそういった自国の民衆や古いジェントルマン達の価値観に一定の「改良」を施すことで形づくられてきたものといえる。いわゆる，勝って奢らず負けて悪びれず，相手を重んじ，対等の立場に立って勝負に挑むという「スポーツマンシップ」が形成されてきたのである。

テニスは，19世紀後半からクラブを中心にジェントルマンを中心的な担い手として行われてきた。テニスも数多くの変革を経験してきたが，発信地としてのイギリスにおいては，未だ古き伝統を誇示している面が多々存在する。その顕著な例が格式を重んじるウインブルドンや国内統轄機関の名称 Lawn Tennis Association にみられる。

テニス界の組織におけるイギリスの力

①国際テニス連盟(Internatinal Tennis Federation ITF)

ITF は，各国テニス協会を通して，世界の

テニス界を統轄している。毎年何らかの改正が行われるルールの作成，国別対抗戦を主催（男子はデビスカップ，女子はフェデレーションカップ）する。ITFに絡んで最近までイギリスの力の大きさを見て取れる2つのことについて説明する。

ITFは，1912年7月イギリスとフランスがデビスカップ戦で対戦した際，結成の話が持ち上がり，その年の10月20日，主にヨーロッパの国が集まってパリで創設された。ITFが創設されるまでは，イギリステニス協会が国際テニス連盟としての役割を担っていた。そして，イギリステニス協会は，全英テニス選手権（ウインブルドン）をローンコートの世界選手権としてきた。アメリカはウインブルドンがテニスの世界選手権であることに強い不満を持っていた。このことが，初期のITFがヨーロッパ中心でアメリカが参加しなかった大きな理由といわれている。アメリカが参加しないITFは，インターナショナルな力を持たず，ヨーロッパ協会程度の力しかなかった。そこで，1926年，ITFはウインブルドンを世界選手権とみなす方針を取りやめ，全英テニス選手権，全仏テニス選手権，全米テニス選手権，全豪テニス選手権は，同格であるという方針を打ち出した。この結果，アメリカも納得し，ITFに加盟した。ITFは，名実ともに世界のテニス界の統轄団体としての重みを加え，メンバーが急増した。

1977年まで，ITFはILTF(Lawnが中に入る）といった。もともと，イギリスのローンの上で始まった球技であり，イギリスの流れを汲んだ国々が主な活動国であったためであるが，1970年代頃から世界各地にテニスが普及するようにより，ローンコートだけでなく，色々な種類のテニスコートが出現したことが名称変更の大きな理由といわれている。イギリスは反対したが，賛成する国々が多くILTFからITFに変更された。

②男子テニスプロ協会（The Association of Tennis Professionals ATP）

生活に不安を覚えていた多くのプロテニスプレーヤーは，労働組合のような組織として1927年9月全米テニス選手権開催中にATPを結成した。ATPは，一番マスコミ等が取り上げるウインブルドンに照準を絞り，プロプレーヤーの地位向上のための交渉の手段として1973年6月ウインブルドンボイコットにでた。プロテニスプレーヤーの多くがボイコットに参加した。その結果，ウインブルドンボイコットという行動がプロテニスプレーヤーの団結という財産を生み出し，男子テニス界で発言力を増し，1975年2月以降は，ITF，トーナメントデイレクターズ会議と共に調整機関（男子テニスプロ評議会）を作り，大会の日程，賞金のアップ，プロの処罰規定作成等を行ってきている。

テニスの発展史におけるイギリスの役割

①ポーム全盛期（16世紀初頭〜19世紀後半）

フランスの修道院で行われたジュ・ド・ポーム（jeu de paume）という手のひらで行うゲームがテニスの原型であるといわれている。フランス語のポームは，英語でパーム(palm)といい，掌という意味である。イギリスでは，他の類似した打球戯と区別するために，ポームのことをリアルテニスと呼んだ。

ポームは，クルトポームといって有産市民階級が室内の専用コートで行ったもの，ロングポームといって一般市民が公園や原っぱで行ったものの2つがある。この2つのポームの要素を重ね合わせてテニスが生まれたともいわれている。

クルトポームを行っていた有産市民階級の人々がテニスの発展に大きく貢献し，その伝統と蓄積が19世紀末のローンテニス誕生の下地になったといわれている。

②ローンテニスの形成過程及び誕生

1870年に，ウインブルドン大会を主催する

ことになるオールイングランド・クロッケークラブが誕生し，第1回クロッケー選手権が開催された。その翌年，「フイールド」誌編集長ウオルシュがオールイングランド・クロッケークラブの名誉会長になった。このことは，ウインブルドンが今でいうマスコミと手を携えて発展していく下地になったと考えられる。

1872年に，レミントンに世界最初のテニスクラブが創設され，ウイングフイールドがローンテニスの用具，コート，ルールをパンフレットにして出版した。

1873年には，ヒースコートが中空ゴムボールにフランネルの布を被せたボールを開発したが，テニスは，この中空ゴムボールをいち早く採用したことが普及に大きく貢献した。

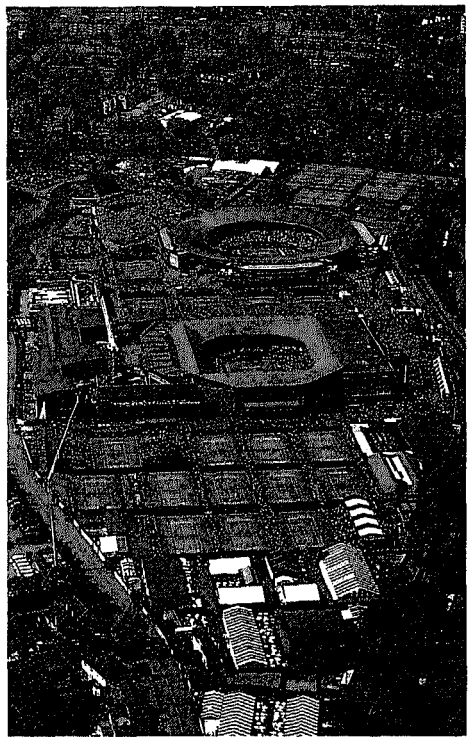
テニスが大きく普及したことから共通のルールが必要になり，1875年にマルリボーン・クリケットクラブにローンテニスのルール制定委員会が設けられた。そして，1877年にローンテニスの競技用ルールがまとめられた。この年，オールイングランド・クロッケークラブ主催の第1回ウインブルドン大会が開催された。当時のリアルテニスのトッププレーヤー達が，テニスのルールを制定することになったので，リアルテニスの影響を強く受けることになった。

③第1回ウインブルドン大会の開催

1877年に，オールイングランド・クロッケークラブが経営困難に陥った。経営を立て直すために考え出されたのが，当時流行し始めたばかりのローンテニス大会を開催し，入場料収入を得ようというものであった。観客は200人程度だったが，当時としては成功であったといわれている。

④近代化へのステップ

ウインブルドン大会の開催を契機として，ルールの統一が抵抗なく進められた。そして，ローンテニスは中空のゴムボールをいち早く採用したために国際化への道を一直線に進むことになった。その理由として，中空のゴムボールは技術の習得が容易であり，それが技術の発展に繋がり，ひいてはテニスの大衆化に結びついた。しかし，中に芯のあるボールを用いていたロングポームは芝で弾みが悪く，テニスに遅れをとった。また，テニスは，ウイングフイールドのように今で言えばスポーツ用具といえるポータブルコートを特許商品として販売して売り込もうとするなど商業化への道を進んだ。さらに，クラブと雑誌社がタイアップして利潤を追求しようとするテニス大会を事業としてみるようにもなった。



現在のウィンブルドン全景（1927年当時はセンターコートより上方は空地であった）

⑤テニスパーテイの流行

ウインブルドン大会の開催は，テニスの競技化や技術の発展ばかりでなく，大衆化に大きく貢献した。いわゆる19世紀後半に台頭してくる有産市民階級の間に絶大な人気を得たことがテニスの発展に大きく寄与した。そして，有産市民階級の人々は，熱心にプレーし，

クラブを組織し，自宅にテニスコートを設け，テニスパーテイを開いたりした。

⑥オープン化

1968年以前から，各大会で金品を受け取る偽アマチュアの横行とこれに目をつぶる大会主催者の偽善に各国テニス協会は耐えられなくなった。また，抜群の人気と技能を持つプレーヤーは，巨額の契約金でプロに転向したため，各トーナメントの中身が寂しくなり，観客離れが目立つようになった。そこで，イギリステニス協会は1967年12月の年次総会で翌年からプロを受け入れるという歴史的動議を通した。これに対して，ILTFはイギリステニス協会を追放できず，1968年3月のパリ総会で，イギリスの決定を黙視し，各国テニス協会で，アマチュアリズムについてのルールづくりと18才以上のプレーヤーの賞金の受け取りを認めることになった。

ウインブルドンの伝統と格式

今も残るウインブルドンの伝統と格式のいくつかを示すことにする。

①ウインブルドンは，第1回大会以来現在まで，芝(Lawn)のテニスコートで大会が行われてきた。全米テニス選手権，全豪テニス選手権も1970年頃代までは芝のコートで開催されてきたが，芝の維持管理等が難しくなったことや手入れが簡単な新しいテニスコートが出現したことにより，ハードコートに変更して開催されるようになった。

②ウインブルドンは，大会開催期間中の2週間しかセンターコートは使用しないといわれている。ウインブルドン開催中の2週間以外の350日は，コート整備を行っているだけであるという。また，センターコートのオープニングマッチは，必ず前年度の男子シングルス優勝者のシングルス1回戦が行われることになっている。また，イギリスの気候の特徴として朝露がおりることが多いため，芝コートで行われるウインブルドンは，12時以降しかコートが使用できないことが特徴として挙げられる。特に，センターコートは，14時以降しか使わないため，いくら真夏で日没が遅く9時頃まで試合ができるといっても1日に3試合が限度である。そうすると，ウインブルドンのセンターコートでは，だいたい35試合前後しか行われないことになる。ウインブルドン大会の試合数は，一般男女のシングルス，ダブルス，及びミックスダブルス合わせて440試合ほどあるが，このように，センターコートで試合ができる人の数は大きく制限されることになる。

表彰式の様子（1926）

チャンピオンズディナーでのウィリアムズ姉妹

②ロッカールームの使用基準に階級制があるのもウインブルドンの特徴である。ロッカールームは大きく3つに分けられている。シードプレーヤー用，世界ランキング50位前後までのプレーヤー用，それ以外のプレーヤー用である。上位のプレーヤーはどこのロッカールームを使用してもよいが，下位のプレーヤーが上位が使用するロッカールームを使用することはできない決まりになっている。このように，プレーヤーのレベルによって待遇に格差を設けているのである。

③大会会長は，王族（現在はケント公）であり，大会開催中は，王族が観戦に訪れることもしばしばである。そのため，王族が観戦しているセンターコートで行われる試合に出場するプレーヤーは，試合前に控え室で警備の人からコート上での王族に対する挨拶のし方を学ぶことになっている。

④全英テニス選手権（ウインブルドン）は，他の4大トーナメントと違って第1回大会から The All England Lawn Tennis and Croquet Club というイギリステニス協会でもないひとつのクラブが主催してきていることも大きな特徴の一つである。

受講学生の反応

ここでは，受講した学生130名の感想文から，イギリス，ウインブルドンがテニス界に果たしている役割の大きさ，The All England Lawn Tennis and Croquet Club は，古い格式と伝統を通して何を伝えようとしているのか等について，学生がどのように感じたかを示すことにする。

工学システム学類2年男子

テニスは元から今のような形をしていると思った。しかし，テニスと呼ばれる名が定着するのに約100年，ポームからテニスに変わるのに200年，計300年もの歳月をかけて形成してきた。それまでに，色々な国々の勢力，個人の利益等にもまれてきた。

もしかしたら，まだ，テニスは完成していないかも知れない。ポームからテニスに変わったように，テニスから何かに変化しているかも知れない。それもまた何百年という歳月をかけるのだろう。スポーツも日々進化している。スポーツもある意味生物かもしれない。

国際総合学類2年男子

テニスはもともと貴族が行うスポーツとしても名高い。ウインブルドンはその典型で，ロッカーまで階級性を設け，その品位を保っているのは素晴らしい。イギリスは文化的に格式を重んじる国であり，その伝統をかたくなに守りつづける様子は好感を持てる。大会が大きくなればなるほど，，その格式はプレーヤーのモチベーションを高め，観客ものめり込める。これからも，ウインブルドンのようなテニスは格式を持って行われてほしい。

人間学類2年男子

ウインブルドンが何故ここまで神格化されたような大会になっているのかということが何となくであるが分かったような気がする。その第一は，やはり王室が深く関わっていることにあると思う。例え，日本人や英国人以外でも英国王室と聞けば，どこかしら構える部分が出てくる。それは，王室自体が権威と伝統に裏打ちされた存在だからである。賞金とかいった部分でこれに優る大会が現れたとしても，この大会に勝つことの名誉に比べれば，そんなことは小さいことなのかもしれない。

自然学類2年男子

以前の授業でイベントを扱ったものがあり，ウインブルドン大会がグランドスラムの中で一番権威あるものといわれていた。今日は，その理由がよくわかった。いろいろな要素があったが，一言でいえば，トップアスリートに敬意を払い，待遇していることであろう。だからこそ，この大会に対する思いがプレーヤーの中で高まり，それにつられて，ウインブルドンを見ることにも意味が高まり，観客

は熱中するのであろう。恐らく，テレビでは伝わらない生でしか味わえないものが“そこ”にはあるのだろう。

体育専門学群1年男子

テニスの発展の影に大きな商業的要素が含まれていることにすごく意外性を感じた。歴史の中でイギリス協会は常に先頭を切って革新を起こしたり，王室を上手く利用したりと，世界 No. 1 の大会であるということを強烈にアピールしていると思う。単にテニスとしてみていては気づかない裏の面にある格式，権威といったものを大切にしていることがとてもよくわかった。様々な商業的思惑やブランド等々，昔のことのみでない現代にまでも当時の絶大な影響力を思わせるものが残っていることは驚きだ。

このように，本講義はウインブルドンに対するテニスプレーヤーのあこがれの原点を色々な角度から考察することを通して，スポーツを観戦したり，プレーしたりする際のバックグラウンドを広げる効果があったのではないかと推察できる。共通体育ではスポーツの実技を中心に行っているが，総合科目を通してスポーツの多面性を伝えることは，学生が将来いろいろな道へ進んでも，スポーツに愛着を持ち，応援する姿勢を増大させることになると思われる。

付記）本研究は，平成12年度筑波大学体育センター課題研究からの助成に基づいて行なわれたものである。

文　献

1）池田　潔：自由と規律―イギリスの学校生活―，岩波書店，142-171，1995
2）岸野雄三，他編：最新スポーツ大事典，大修館書店，831-844，1987
3）James Medlycott : 100 YEARS OF THE WIMBLEDON, 1977
4）Lance Tingay : 100 years of WIMBLEDON, 1977
5）松井良明：近代スポーツの誕生，講談社，8-62，182-206，2000
6）村岡健次，他編：イギリス近代史，ミネルヴァ書房，106-117，143-163，1998
7）中村敏雄：メンバーチェンジの思想，平凡社，1994
8）中村敏雄：近代スポーツ批判，三省堂，1977
9）沢松奈生子：ウインブルドンの風に誘われて，旺文社，1999
10）The All England Lawn Tennis and Croquet Club 編 : THIS IS WIMBLEDON, 2000